



平成 15 年 8 月 5 日

財団法人 国際文化会館
理事長 嘉治元郎 様

社団法人 日本建築家協会 (J I A)
関東甲信越支部 支部長 松原忠策
保存問題委員会委員長 小西敏正

国際文化会館の建築ならびに庭園の保存についての要望書

拝啓 時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

貴財団におかれましては、永きに渡り国際文化会館の運営に尽力されて来られたことに、当協会より深く敬意を表します。

私ども日本建築家協会では、建築をはじめ造園や街路施設等 それぞれの意匠や空間が 都市文化を実体的に形成するという重要な役割を担っていると自覚し、さらに、個々の建築物が永く使い続けられ活用されることによってはじめて、その都市文化に歴史的な奥行きがもたらされ、醸成がなされると考えております。この点で、貴財団が会館の建物並びに庭園をみごとに維持されてこられましたことにつきましては、ここに重ねて敬意を表する次第です。

さて、ご高承のとおり 国際文化会館の旧館部分は、日本の現代建築史上の最も高名な巨匠のうち 3 人もの協働設計によるものであり、その意味で前例も後例も無く、またモダニズムの建築空間を由緒ある日本庭園と巧みに調和させるというデザインの妙を実現した、貴重な建築作品であり、日本建築学会賞受賞作ともなっています。

このたび、貴財団が諸般の事情から、周辺の地権者の方々と共に再開発計画をお考えということを知り、この貴重な作品や由緒ある庭園が無くなる可能性のあることを知り、当委員会では何とかこれらの現地保存をお願いできないものか、議論を重ねてまいりました。

前川國男・坂倉準三・吉村順三、この 3 名の建築家が、当協会の前身 (旧 日本建築家協会) 発足期の精神的な中核に居たこと、また、戦後の困難な時代にアーキテクトの社会的地位を確立せんと奮闘したことに想いを馳せれば、これら先達の残した「個性の融和協調」の実験例を後世に残し伝えることは、貴財団の理念に、その最も崇高な部分で合致するものと確信いたします。

すなわち、貴財団が日本と世界の人々の文化交流によって国際相互理解を促進されてこられた、まさにその一環として、日本が世界に誇りうる建築家 3 名の協働作品と美しい庭園とを有機的な一体として現地保存・活用して頂くことは、建築やその周辺芸術が持つべき文化的価値を世代を超えて紹介し、あるいは広く世界に日本の近現代建築史の一断面を伝える、もっとも有効な手段と考えられるからであります。

わが国の人口の減少を将来に控えて「スクラップアンドビルド」がもはや物理的にも時代の要請にそぐわなくなりつつある今日、貴会館の建物と庭園を現地保存して頂ける技術的可能性は、十分残されていると思料し、ここに表記の要望を重ねてお願いする次第です。

私どもと致しましてもそのための協力は可能な限りさせて頂きたく、お声をお掛け下されば幸いに存じます。

敬具